

痛

いたい
いたい
とんでいけー!!

第30回 公益財団法人 成長科学協会
公開シンポジウム

「いたいいたいのとんでいけー
～子どもの痛みの意味を考える～」

- 演者**
- 坂本真樹 / 電気通信大学大学院情報理工学研究科情報学専攻教授
「こどもが使う痛みの表現」
 - 橋彌和秀 / 九州大学大学院人間環境学研究院准教授
「他者の痛みを感じるこころの発達とその基盤：共感性を手掛かりに」
 - 加藤 実 / 日本大学医学部麻酔科学系麻酔科学分野診療教授
「こどもの痛みについてもう一步踏みこんで考える」

司会 廣中直行 (LSIメディエンス薬理研究部顧問)、上村佳世子 (文京学院大学人間学部心理学科教授)

日時 2017年6月10日(土) 13:30～16:30

場所 UDXシアター (秋葉原UDXビル4階)

参加無料

お申し込み方法

氏名、人数、連絡先(電話番号かメールアドレス)を明記のうえ、件名「第30回シンポジウム申し込み」にてE-mail (kimoto@fgs.or.jp) または FAX (03-5805-5370) までお申し込み下さい。

INTRODUCTION

ごあいさつ



公益財団法人成長科学協会
理事長：田中 敏章

成長科学協会は、毎年子どもの心の問題に関する公開シンポジウムを開いておりますが、今回で第30回を迎え、「いたいいたいのとんでいけー～子どもの痛みの意味を考える～」というテーマで開催いたします。

子どもが使う痛みの表現について電気通信大学電気通信学部の坂本真樹先生、子どもが痛みを共感することによるコミュニケーションの発達について九州大学大学院人間環境学研究院の橋彌和秀先生、痛みが子どもの身体に与える影響について日本大学医学部麻酔科の加藤実先生に、それぞれ講演していただきます。ご参加の皆様も、積極的に質問・討論に参加していただければ幸いです。

タイムスケジュール

日時：平成29年6月10日(土)

テーマ：「いたいいたいのとんでいけー～子どもの痛みの意味を考える～」

- 13:30 開会あいさつ
- 13:35 「こどもが使う痛みの表現」
坂本 真樹 (電気通信大学大学院情報理工学研究科情報学専攻教授)
- 14:15 「他者の痛みを感じるこころの発達とその基盤：共感性を手掛かりに」
橋彌 和秀 (九州大学大学院人間環境学研究院准教授)
- 14:55 「こどもの痛みについてもう一步踏みこんで考える」
加藤 実 (日本大学医学部麻酔科学系麻酔科学分野診療教授)
- 15:35 〈休憩〉
- 15:55 質疑応答・ディスカッション
- 16:30 閉会

こどもが使う痛みの表現

坂本 真樹 / 電気通信大学大学院情報理工学研究科情報学専攻教授

私たち大人は、病気になったり怪我をしたりすると、その時の心身の状態を表すのに、「ずきずき」「ひりひり」といったオノマトペ（擬音語と擬態語の総称）や、「ハンマーで殴られたような」といった比喻を使うことが多い。このような表現が、診断において重要であることが知られている。例えば：患者「頭が痛いんです」、医師「どのような痛みですか?」、患者「が一んという感じの痛みです」、医師「ハンマーで殴られたような痛みですか?」、患者「そうです」というやりとりが成立した場合、クモ膜下出血の確率

が非常に高いと言われていています。大人であれば自然に使えるオノマトペや比喻であるが、「おなかがむかむかする?」と聞いても、このような表現を子どもが理解するのは難しいことが多い。養育者が使う表現にオノマトペが多いとされることや、子ども向け絵本にオノマトペが多いことを考えると意外に感じられる。本講演では、子どもが大人の痛みのオノマトペを理解するのが難しいのはなぜなのか、子どもの痛みに寄り添うにはどうしたらよいのか、といったことについてお話したい。

他者の痛みを感じるこころの発達とその基盤：共感性を手掛かりに

橋本 和秀 / 九州大学大学院人間環境学研究院准教授

他者の痛みを、私たちは原理的に知覚することができない。しかし一方で、その他者の痛みを知覚できているかのように感じる瞬間はたしかにあるし、そう振る舞い反応する（できる）ことが心理的な「絆」を生み出すことさえある。社会を形成・維持し、コミュニケーションを可能にする基盤としての「共感」を手掛かりに、このような感覚を生み出す「こころ」の発達とその背景について考えたい。乳幼児期の日常的なコミュニケーションを可能にしているこころの仕組みの一端を理論的な検証と行動

実験を通して明らかにしてきた我々の研究を紹介させていただく。「自己を、他者を含む世界から切り離し確立する」という古典的な自我発達観と並行して、「自他を混同する」ことで成立するこころのメカニズムとしての共感」を想定することで、「痛みの共有」までも可能にしている、私たちの日常におけるコミュニケーションの謎に迫りたい。同時に、「共感すること」が持つ、同調圧力や個別的な差異の軽視・排除傾向という負の側面についても論じておきたいと思う。

こどもの痛みについてもう一步踏みこんで考える

加藤 実 / 日本大学医学部麻酔科学系麻酔科学分野診療教授

子どもは病院で検査、採血、ワクチンなどの痛みを伴う医療行為を受ける際に、「怖いな」「痛いのはいやだな」「でも仕方ない」などの気持ちが芽生えています。日本では「痛みは我慢、我慢は美德」という文化があります。一方医療従事者は、子どもや保護者に「大事な検査だから」「一瞬で終わるから」「麻酔も痛いから」と説明し、積極的な痛み予防策は無く、痛みを伴う医療行為を実施しています。でも仕方がない痛みは子どもの体に悪い影響を与えていないのでしょうか。そんな疑問に答える新事実が続々と明らかにされています。例えば強い痛みや痛

みが長引くと、恐怖感に加えて、気持ちとは関係ない体の反応として、痛みを伝える神経が痛みを伝えやすくなり、痛みを感じ易い体になることが分かってきました。その影響は子ども時代だけでなく、成人の慢性痛へと発展することも示唆されています。講演では、痛みを感じ易くなるメカニズム、感じ易くなった際の症状、痛みの病気、治療法、そしてカナダのワクチン接種で行われている保護者と医師の両者に対する具体的な痛み予防法などについて紹介したいと思います。

演 者

坂本 真樹 / さかもと まき

1998年3月東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程修了（博士（学術））。1998年4月同専攻助手、2000年4月電気通信大学電気通信学部講師、准教授を経て、2015年4月同大学院情報理工学研究科教授。2016年8月同大人工知能先端研究センター教授を兼務。2016年10月よりオスカープロモーション所属（業務提携）、専門分野は感性情報学（人工知能学会、情報処理学会、認知科学会、認知言語学会等で活動）。

橋本 和秀 / はしや かずひで

1968年広島県生まれ。京都大学大学院理学研究科博士後期課程霊長類学専攻修了。1997年博士（理学・京都大学）。日本学術振興会特別研究員PD（東京大学医学系研究科）、京都大学教育学研究科助手を経て現職。コミュニケーションおよびその基盤となる「こころ」の起源に発達と進化の両側面から、乳幼児を対象とした行動実験と種間比較の手法を用いて実証的にアプローチしている。

加藤 実 / かとう じつ

日本大学医学部麻酔科診療教授、日本大学医学部附属板橋病院痛みセンター長。トロント大学医学部麻酔科客員教授（1996）。東京消防庁から感謝状（平成12年）、日本スポーツ振興センター 学校安全アドバイザー、2016～2017年ベストドクター。現在は「ペインクリニック」「緩和ケア」、加えて看護師・薬剤師・精神科医・ペイン医が順次一人の患者さんを診察する「集学的外来」の3部門で構成される痛みセンターで痛み治療に従事。

司 会

廣中 直行 / ひろなか なおゆき

LSIメディエンス薬理研究部顧問。医学博士。東京大学文学部心理学科卒。実験動物中央研究所、理化学研究所脳科学総合研究センター、科学技術振興機構 ERATO 下條潜在脳機能プロジェクト、NTTコミュニケーション科学基礎研究所等を経て現職。専門は神経科学、精神薬理学。

上村 佳世子 / うへむら かよこ

文京学院大学人間学部教授。教育心理学、文化心理学、心理学基礎実験を担当。専門は発達心理学。家族間の相互行為の観察から、幼児がどのように言葉および行動スタイルを獲得していくかを研究テーマとしている。